

## 「成長し続けるために」

私達が「成長」という言葉を使う時、そこには前向きな希望があります。私達は庭の草花の成長を喜びますし、経済の成長という言葉は肯定的に受け止められます。そんな成長という言葉を書く時に、私達の多くが思い浮かべるものの一つに「子供の成長」ということがあります。

先日、テレビで専門家が「なぜ大人になると月日が経つのが早いのか？」ということを読み明かしていました。その方によりますと、その原因は「大人は子供のようにときめくことがなくなったからだ」と言っていました。子供は日常の色々なこととときめますが、大人になると、そのようなときめがほとんど何もなく（すなわち日常の感動が激減したということです）、ゆえに生活が単調で、時間が経つのを早く感じるということです。このように子供には私達、大人が失ってしまったものがあります。純粋な感受性、新鮮さ、柔軟さ……。私達は子供から今も多くのことを学ぶことができます。

しかし、反対に聖書はいつまでも子供のままでいてはいけないと言います。エペソ4章14節—15節にはこの「子供」について、こんな言葉が書かれています「こうして、わたしたちはもはや子供ではないので、だまし惑わす策略により、人々の悪巧みによって起る様々な教えの風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることがなく、愛にあって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達するのである」（エペソ4章14節—15節）。

また、コリント第一の手紙14章20節には「兄弟たちよ。物の考えかたでは、子供となつてはいけない。悪事については幼な子となるのはよいが、考えかたでは大人となりなさい」とあります。

子供は互いに譲り合うことができず、自分の願いが通らなければ駄々をこね、やられたらすぐにやり返します。もし、一歩引いて譲ることができる、何事も忍耐したり、相手を包み込むことができる子供がいたら、それはそれで私達は心配します。その子は人が成長するプロセスを経ずに、克服していくべき、学ぶべき大切な経験をスキップしてしまったのではないかと私達は心配するのです。私達は年相応の経験を経て、成長していくからです。

子供は心にあることをそのまま言うことがあります。以前、近所のスーパーで買い物をしていた時、レジで並んでいましたら、子供達が前に並んでいるおじさんが大量に購入しているジュースやスナック菓子を見て、「あれでは健康に悪い」というようなことを言い合っていました。さいわい、彼らは日

2018年8月5日「成長し続けるために」

本語で話していましたが、その方に気がつかれずに済みましたが、ここでも、特に日本では絶対に口にすると釘を刺しました。

他にも子供ゆえに色々なことがあり、その度に私達は「やめなさい」とか「こうしなさい」とたしなめることがあります。同じことを我々、大人がしますと「なんと大人気ないのだ、子供みたいだ」ということになります。私達は段階を経て成長しますから、子供時代に許されたことも、年月を経て、大人である者が子供と同じことをするという事は許容されなくなるのです。大人には大人にふさわしい振る舞いというものが求められるからです。

同じことがクリスチャンの成長にも言えるのだと聖書は私達に語りかけます「もう一度、神の言葉の初歩を、人から手ほどきしてもらわなければならないのか。堅い食物ではなく、まだ乳を必要としているのか」（ヘブル人への手紙5章12節）。

この言葉はクリスチャン信仰とは一つ所に留まり続けるのではなくて、成長すべきものであり、私達にはその覚悟が必要だということを私達に語りかけます。私達はいつまでも初歩的なところに止まり、いつまでも乳を飲んでいくようではない。しっかりと堅い食物を食べて成長しなければならないということが強く勧められているのです。そこで今日はこの私達の成長ということについて三つのこととお話したいと思います。まず、最初に「成長は願うことから始まる」ということです。

### 成長は願うことから始まる

子供の体はよく栄養をとって、ある程度の運動をしていれば、本人の願いとか意思にかかわらず、成長しますが、私たちの霊的な成長というのは願うことなくして起きません。ある方が「私が日々、願っていることは今日の自分よりも、明日の自分がさらに成長していることです」と言っていました。その人は、そのために今日、何ができるのかということを経験しているのです。確かにその人は傍から見ても、その人格が年ごとに豊かに変えられていくように見受けられました。そう、その方にはそうなりたいという願いがあるからです。

ヨハネ5章2節—9節に、38年もの間、病気に悩んでいた人の姿が描かれています。読んでみましょう。②エルサレムにある羊の門のそばに、ヘブル語でベテスタと呼ばれる池があった。そこには五つの廊があった。③その廊の中には、病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者などが、大ぜいからだを横たえていた。〔彼らは水の動くのを待っていたのである。④それは、時々、主の御使がこの池に降りてきて水を動かすことがあるが、水が動いた時まっ先にはいる者は、どんな病気にかかっているか、いやされたからである〕⑤さ

て、そこに三十八年のあいだ、病気に悩んでいる人があった。⑥イエスはその人が横になっているのを見、また長い間わずらっていたのを知って、その人に「なおりたいのか」と言われた。⑦この病人はイエスに答えた、「主よ、水が動く時に、わたしを池の中に入れてくれる人がいません。わたしがはいりかけると、ほかの人が先に降りて行くのです」。⑧イエスは彼に言われた、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」。⑨すると、この人はすぐにいやされ、床をとりあげて歩いて行った。その日は安息日であった。

皆さん、この人は38年もの間、病で苦しんでいたのです。その病気ゆえに彼は普通の家庭生活や仕事を持つことも出来ないでいたのでしょう。このまま、自分の人生は閉じられていくという思いがあったことなのでしょう。しかし、ベテスダという池に神の使いが降りてきて、その水を動かす時、その時、真っ先にその池に入るならば、どんな病気にかかっていたとしても、癒されるということを知って、以来、そこに居続け、それが38年にもなったということです。

彼の生活は、その瞬間を待つたくさんの病人、盲人、足の不自由な人、やせ衰えた人と共にありました。そんな彼がイエス様の目にとまりました、そしてその彼の境遇を知ったイエス様は彼に聞いたのです「なおりたいのか」。この言葉は言い方を変えれば「そこにこれからも居続けるのではなくて、そこから新しい生活を本当に始めたいのか」ということです。

これは不思議な言葉です。38年、寝たきりであったのなら、なおりたいに決まっている。その彼にイエス様はあえて「なおりたいのか」、すなわち「そこから先に進みたいのか」と彼の気持ちをたずねたのです。この問いに対して彼はイエス様に言ったのです。「主よ、水が動く時に、わたしを池の中に入れてくれる人がいません。わたしがはいりかけると、ほかの人が先に降りて行くのです」

彼はそこに自分が38年もいるのは、誰も私を助けてくれる人がおらず、またいつもその競争に負けてしまうからだと言いました。

この出来事は私達に理解できないような難しい話ではありません。しかし、ここにはとても大切なメッセージが隠されています。そう、それは私達もこの男のように生きているかもしれないということです。

そのままの状態にとどまり続け、色々な言い訳をしながら、日々を暮らす人達がたくさんいます。「その生き方を変えたいのか」「前に進み出たいのか」「そこから成長をしたいのか」という問いかけに対して、もちろん、そのことを願ってはいるのだけれど、色々な口実やこれまでの前例を取り上げ

2018年8月5日 「成長し続けるために」

て、そんな願いなんてものはや聞かれるはずなどないだろうという思いで生きている私達の姿です。

イエス様はマタイ8章13節には中風で苦しんでいる自分の僕を治していただくこと、イエス様のもとに来た百卒長の姿が描かれています。彼はイエス様こそが僕を癒して下さるお方であるということに堅く信じて訴えます。その彼の信仰を見てイエス様は彼にこう言われるのです。「行け、あなたの信じたとおりになるように」。そうしますと、ちょうど、その時にその僕は癒されたということです。

このイエス様の言葉は私達に語りかけます。「あなたは何を信じているのか」。なぜ、この問いかけは私達にとりまして大切なのですか。なぜなら「私達が信じたとおりになるからです」。あなたが「これはだめだ」「もう手遅れだ」と思っているのなら、私達がそう信じているとおりになるからです。

自分の人生は一向によくならない。そうしますと、まさしく、その人生はよくならない。なぜ？いぶかしく思う必要はありません。原因は簡単です。そうです、「あなたの信じたとおりになるように」。その「よくならない人生」とは「私達が、よくなるはずがないと信じて疑わない人生」なのですから。

「私達が日々、何を願っているのか」ということが、私達の人生を決め、「私達が日々、何を信じているのか」ということが、私たちの信仰生活を決めます。私達が「願うこと、信じること」ということは私達が思う以上にとっても大切なことだとは思われませんか。

私達は信仰者でありながら、その生涯に神がなさろうとしていらっしゃる神のみ業をほとんど見ることなく日々を過ごすかもしれません。なぜ？私達が信じたとおりに、事は何も起らないからです。私達の成長はまず願うこと、そして信じることから始まります。ここがスタートです。二つ目の事、それは「成長には条件がある」ということです。

成長には条件がある。

種から芽が出て、やがて実が実るということを考えてみましょう。私の家では生ごみをコンテナに入れて、それを肥やしにして用いています。今年の春、そんな肥料を土に混ぜて苗や種を植えたのですが、それらの苗や種よりも力強く、生ごみとして捨てていたカボチャの種が芽を出し、今、大きなカボチャが実りつつあります。

2018年8月5日 「成長し続けるために」

自然界には神様が定められた法則というものがあまして、私達はこの法則にのっとって動いています。そして、それは私達の生き方というものにも当てはまるのです。その法則とは「よい土壌に蒔かれた種はやがておのずと芽を出し、実を实らせる」ということです。この法則にのっとって、このカボチャの種は芽を出し、実を实らせました。

そうです、私達が注目すべきことは、その種がどんな土壌に蒔かれたかということです。その土壌に十分な養分があるのなら、その植物は育ちます。しかし、そうでないなら、どんなに良い種を蒔いたり、苗を植えて、毎日、欠かさずに水を注いでも育つことはありません。肝心なことは土壌です。これは蒔く、植える前の成長の大前提です。

詩篇1篇には『このような人は流れのほとりに植えられた木の時が来ると実を結び、その葉もしばまないように、そのなすところは皆さ変える』（詩篇1篇3節）とあります。『正しい者はなつめやしの木のように栄え、レバノンの香拍のように育ちます。彼らは主の家に植えられ、われらの神の大庭に栄えます』（詩篇92篇12節－13節）とあり、イエス様は四つの土地にまかれた種についてのたとえ話を語り、良い地、すなわち良い土地に蒔かれた種は30倍、60倍、100倍の収穫を得ると語られました（マタイ13章8節）

これらの言葉に共通していることは、その種の成長はその種がまかれた土壌にかかっているということです。このように自然界で起きていることは、そのまま私達の成長にも当てはまります。そうです、私達の成長に欠かせないのは、どのような土壌に私達はおり、そこからどれだけの栄養を受け取っているかということです。

これが私達の成長の大前提です。ですから、私達は豊かな土壌に自らを置くべきです。その「土壌」には色々な解釈がありますでしょう。それは私達の「耕された心」を意味しますでしょう。主から命の水を吸い上げることができる環境というのもありますでしょう。そこに私達が根ざしていくのなら、おのずと私達の内には私達の成長に不可欠なものが吸収されていくのです。この中で一つ、詩篇92篇に記されている「主の家という土壌」についてお話ししましょう。

皆さんもお分かりいただけると思うのですが、洗礼を受けるということがクリスチャンのゴールではありません。そこからクリスチャンライフは始まるのです。そして洗礼を受けて始まったクリスチャンライフは教会に連なり、そこで養われることによってスタートします。すなわち、私達のクリスチャンとしての成長に教会は欠かせないものとなります。しかしながら、これが

2018年8月5日 「成長し続けるために」

ら洗礼を受けて、クリスチャンになろうとしている人に、そこまで考える人は少なく、長くクリスチャンでありながらも、自分はクリスチャンとして成長するために養われていく必要があるのだということを考える人も多くはありません。

例えば私達がスポーツジムに入会するとか、旅行のツアーに参加するのなら、ジムやツアーが自分に提供してくれるものを細かくチェックしますでしょう。ジムに入会する手続きが、健康な体の保証とはならず、ツアーの参加費を支払うことが最高の旅行の保証とはならないからです。肝心なことはそのジムやツアーが実際に自分に何を提供してくれるかということなのです。

同じように私達は自分の成長を育む土壌の一つとなる主の家、すなわち今日で言うのなら教会が、どのように自分を霊的に養い、自分の成長のために必要なものを提供してくれるのかということをよくよく考えることは大切です。洗礼は受けたけれども、以来、養われることなく、ゆえに何の成長もなく、ただ惰性によって教会に来続けるというようなことがないためにです。教会はそこに集う方々にとりまして豊かな土壌であり、またその豊かな土壌を提供すべきなのです。

しかし、私達の成長は豊かな土壌だけでは成り立ちません。皆さんにもご自身の成長のために責任があります。パウロはピリピ2章12節で言いました。『わたしの愛する者たちよ。そういうわけだから、あなたがたがいつも従順であったように、わたしが一緒にいる時だけでなく、いない今は、いっそう従順でいて、恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい』

パウロはここでははっきりと私達は自らの救いの達成のために努めよと書いています。それは誰かが皆さんのためにしてくれることではないのです。それは皆さんがすべきことなのです。努めるべきことなのです。

コリント第一の手紙3章6節―7節には有名な御言葉があります「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし成長させて下さるのは、神である。だから、植える者も水を注ぐ者も、ともに取るに足りない。大事なのは、成長させて下さる神のみである」。

ここでまず私達に大いなる励ましと慰めを与えてくれる言葉に目がとまります。そうです、「私達を成長させて下さるのは神様なのだ」ということです。このことは全く正しいことです。神様が私達を成長させてくださいます。しかし、その前の言葉をも私達は心に刻まなければなりません。

すなわち「わたし（パウロ）は植え、アポロは水を注いだ」ということです。種を適当に蒔いておいて、後は神が育ててくれると放っておくのではないの

です。自ら良き地を選び、自覚的にそこに自らのを置き、そして、そこに成長に必要な水を来る日も来る日も注ぎ続ける。これらの条件が整って、神様は私達を成長させてくださるのです。パウロの言葉を借りて言いますのなら、「私達がなすべきこと」は確かに「神様がなしてくださること」に比べれば取るに足らないことです。しかし、それがなければ神様のなしてくださる私達の成長はとどめられてしまうのです。

良き土壌に植えられていることで万事でオーケーなのではありません。そこから私達は成長を強く願い、そのためにできることをするのです。努めるのです。積極的に御言葉に触れ、それを学ぶ機会があるのなら、それを逃してはなりません。これらのことがあって、私達は成長します。事はとてもシンプルで、これらは全て私達の決断のもとになされます。しかし、このシンプルなことほど、難しく、私達はこのシンプルなことを前にして、そこから先に進むことをせず、早々に、来た道を引き返してしまうことがあるのです。

### 成長は終わらない

最後のこと、それは「成長は終わらない」ということです。このようなことをお話ししますと、疑問をもたれる方がいるかもしれません。いやいや、私の成長は既に止まっていると。確かに私達の身長はこれ以上は伸びませんし、もはや習得できない技能というものならたくさんありますでしょう。しかし、霊的な成長であるのなら、その成長はまだまだ続きます。

私たちの成長に終わりはないのです。私たちが息を引き取る瞬間まで、私たちはキリストにあって成長するのです。そんなはずはない。いいえ、そうだと聖書は言います。

ヘブル12章1節—2節には、こう書かれています「こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競争を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか」

ここには、人生という道を走っている信仰者の姿が書かれています。その行程において、からみついてくる罪や様々な重荷をかなぐり捨てて、イエス様を見上げて「私たちの参加すべき競争を、耐え忍んで走りぬこうではないか」というのです。もうゴールはまじからだから、ここからは歩こうではないかではないのです。

2018年8月5日「成長し続けるために」

そうです、そのゴールを走りぬくのです。若い時だけ走り、年をとったら立ち止まろう、歩こうではなくて、走りぬこうというのです。走るのをやめてはならないというのです。

イエスを仰ぎ見つつ走り続けるということは、私達が靈的に成長し続けるということです。そして、20歳の青年も90歳の方にも、イエス・キリストにあってその年齢に見合った成長があるのです。

神様が私たちに対して願っておられることは何でしょうか。神様が私達に願っていることは私達が靈的に成長することです。先ほど読みましたように、雲のように囲まれている聖書中の証人達に共通することは、彼らが未だ獲得していない靈的成長というテリトリーに果敢に踏み出て行ったということなのです。彼らはこの一点に、そう、彼らが靈的にどこまで成長できるかということに焦点をあてて、その人生を走りぬいたのです。

人生の最後に私達は人生で獲得したものを全て手放します。しかし、私達の靈的成長はその時に手放すものではありません。ゆえに私達が神の前に成長するということは、本当に価値あるチャレンジなのです。あなたはこの価値あるチャレンジがあることを知り、それに取り組んでいますか。それともこのようなチャレンジがあるということを今まで知らずに生きてきましたか。そうであるのなら、今日からこのチャレンジを受け止め、私達の成長に心を注ぐべきです。

人生最期の日まで私たちには成長の余地があるのですから、まずキリストにあるこの成長を心から願いましょう。「願い」がなければ何も始まりません。そして、根をはるべき土壌を見つけ、そこに留まりましょう。そして、私達は日々、自らの成長のために水を注ぐことに努めましょう。これらがそろって、後は私達を成長させてくださる神の約束の言葉に全幅の信頼を寄せて、自らの成長を楽しみ、待ち望みましょう。この生き方の先に人生の最後に私達が言い残し得る言葉が待っているのです。

「私はよき人生を送った。この人生に感謝する、そして今、私は神のもとに帰る。私のような者を今日まで成長させてくださった主はほむべきかな！」

お祈りしましょう。